

『登柳州城楼』 柳宗元

貶謫の悲しみを乗り越え柳州の神となる

登柳州城楼 柳宗元

柳州の城楼に登る 柳宗元

城上高楼接大荒

城上の高楼大荒に接す

海天愁思正茫茫

海天の愁思正に茫茫

驚風亂飈芙蓉水

驚風乱れ飈かす芙蓉の水

密雨斜侵薜荔牆

密雨斜めに侵す薜荔の牆

嶺樹重遮千里目

嶺樹重なつて千里の目を遮り

江流曲似九廻腸

江流曲がつて九廻の腸に似たり

共來百粵文身地

共に來る百粵文身の地

猶自音書滯一鄉

猶自ずから音書一郷に滯る

【語句の意味】

柳州 現在の広西壮族自治区柳州市

大荒 荒れはてた極遠の地 大地の果て 日月の没する

所 「山海経」「大荒西経」に「大荒の中、山の

荒と名づくるの山有り、日月の入る所、……是れを大荒の野と謂う」と見える

海天 海と空 ここでの海は柳江のことだろう

茫茫 はてしなくひろびろしている

驚風 いきなり強く吹く風

亂飈 「飈」は波をたてること

芙蓉水 蓮の花の咲いている池の水

密雨 すき間なく降りこめる雨 ふりしきる雨

薜荔牆 つる草やまさきのかずらの這っている垣

嶺樹 山の嶺に茂る樹木

九回腸 悲しみの余り腸が九度もねじれる 司馬遷「任少卿に報ゆる書」に「是を以て腸は一日に九たび廻る」とあるのに基づく

百粵 浙江省南部から福建 広東 広西省の地の昔の呼び名 未開地域が多かった

文身 入れ墨 「文」はここでは飾る

音書 手紙

【詩の意味】

柳州の城の高楼に登り四方を見渡すと、この地は大地の果てに連なっているようであり、海と山に私の悲しい思いが果てしなく広がってゆく。

突風は、蓮の花咲く池の水を波立たせ、ふりしきる雨は、

つる草やまさきのかずらの這う垣根に斜めにたたきつけている。

峰の木々は重なり合って、千里の彼方を望む私の目をさえぎり、川の流れは曲がりまがって、悲しみのあまり一日に九たびもねじれる腸のようだ。

共に入れ墨をした人の住む未開の越の国に来て、交した手紙まで通じず、その地に滞っていることは悲しい。

【備考】

この詩は「登柳州城楼寄漳・汀・封・連四州刺史」と題するが、本会では「登柳州城楼」と簡略にした。四州刺史とは、漳州の韓泰・汀州の韓曄・封州の陳謙・連州の劉禹錫。

「唐詩選」

「唐詩三百首」に所収されている。

【鑑賞】

(一) 再びの貶謫による悲しみ

柳宗元は皇帝徳宗の貞元九年（七九三）に、二十一歳で進士に及第し、徳宗の次の皇帝順宗の信頼を得て政治改革（永貞の改革）を進めていた王叔文のグループの中心人物の一人となった。しかし、宦官や守旧派官僚が連合し、順宗の次の皇帝憲宗を推戴した勢力により、この改革は挫折する。憲宗は、王叔文を死刑とし柳宗元（三十四歳）は、永

州司馬に左遷される。劉禹錫、韓泰・韓曄、陳謙も避遠の地の司馬として追放される。

永州での詩には、本会教本にある「江雪」や「漁翁」等がある。永州でまる九年、元和十年（八一五）四十三歳の春ようやく都長安へ帰るようにとの詔を受ける。宗元の喜びは、どれほど大きく深かったであろう。しかし長安では、柳宗元の才を愛し彼を再び用いるべきだとする大臣たちもいたが、憲宗は三月再び永州より遠い柳州刺史として赴任することを命ずる。約一か月の長安滞在であった。劉禹錫ら四人も同じように避遠の地の刺史として改めて追放される。喜びが大きかっただけに、悲しみはより深いものだっただろう。この詩は元和十年柳州到着後すぐの秋の作で、長安から遠く離れた未開、異域に追放された悲痛と、同じ境遇にある友との連絡もとれないさびしさを詠って「暗」い。しかし柳州での詩は次第に「明」るくなっていく。

(二) 悲しみを乗り越えて

永州では権限のない司馬であったが、柳州では地方長官である刺史、どんなに劣悪な環境であろうとも、長官としての権限もあり、自分の力を発揮することができる。

柳州に着いた時、宗元は「是れ豈に政を為すに足らざらんや」（韓愈「柳子厚墓誌銘」）と言ったという。政を行うのにここで何んの不足があるだろうと 彼は唐王朝の朝臣

としての使命感と誇りを持って長官の仕事を全うし、悲しみを乗り越えようとする。四十七歳で亡くなる四年余りの間に、井戸を掘って飲み水の不足を解消する、奴婢を解放する、荒廢した寺院を復興する、土地を開墾して作物を植え植樹を進める等々民のための善政を行う。

ここで一つの五言律詩を紹介したい。柳州でまもなく亡くなるといふ時の詩である。

「種柳戲題」

柳州柳刺史 種柳柳江邊
談笑爲故事 推移成昔年
垂陰當覆地 聳幹會參天
好作思人樹 慚無惠化傳

「柳を植えて戯れに題す」

柳州の柳刺史 柳を種う柳江の辺
談笑故事と爲り 推移して昔年と成る
陰を垂れて当に地を覆うべし
幹を聳えさせて会ず天に参るべし
好し人を思ふ樹と作るに
慚ずらくは惠化の伝無きことを

【詩の意味】

柳州の柳長官が、柳を植えた柳江のほとりに。民とのたのしい語らいは過去のこととなり、時はうつろうて何もかもが昔のこととなる。陰を垂れて地をおおえよ、幹をぐんぐんのぼしてきつと天にとどけよ。周の召伯がその下に野宿したという甘棠の樹のように民が私を思うよすがとなつてほしい、けれどはずかしいのは私には召伯のような良きまつりごとを行つたという言い伝えないこと。

一・二句では「柳」の語呂合わせで少しふざけて「戲題」(たわむれに歌う)と軽みを出している。

三句目の「談笑」は、隣近所の農民との語らいを思わせる。七句目の「思人樹」は、善政の象徴で昔、周の召伯は訴訟を聴いて回るさい、民を煩わせるのをきらい、甘棠の下に野宿して訴えを決裁した。村人はその恩徳をこうむり、その人を慕つて、樹をも敬つたという。柳宗元も召伯のように、柳の樹によつていつまでも民に慕われ思いおこしてもらいたいが、それを望むほどの治績と云い伝えがないと、はずかしがっている。自分が死んだ後も民が柳の下で憩い談笑し、できれば自分の事も思い出して欲しいという安らかな境地に到達したのである。

しかしはずかしがる必要はなかった。宗元が亡くなって三年後柳州の羅地に廟(羅地廟)が、彼を敬愛する柳州の民によつて建てられる。後に規模を拡大して柳侯公園が開



柳候公園大門

〈参考文献〉「柳宗元」林田慎之助著 集英社／「柳宗元詩選」下定雅弘編訳 岩波文庫／「柳宗元」下定雅弘著 勉誠出版

かれ、今も人々の憩いの場となり、長く彼の徳がしのばれることになる。

柳宗元は二度の追放の悲しみや苦悩の中、詩を書き続け、柳州での静かに澄みきった「明」るい詩に到達した。これらの著作は親友劉禹錫に託され後世に残る。韓愈は「柳子厚墓誌銘」に次のように記している。「子厚はかつて若いころ、人のために働くことに懸命で、自分を大切にすることを知らず、功業はたやすく成るものと思っていた。このため処罰され追放されてしまった。……けれども子厚の貶謫がこれほど長い期間ではなく、ここまで行きづまることになかったとしたら、その才能は人にまさるとはいえず、その文章や詩歌が、子厚自身の力によってまちがいがなく後世に伝わるこれほど素晴らしいものになることは、決してなかったろう。子厚が思い通りにいつとき宰相になつていたとしても、それを一時彼が生きた現実と換えてみるに、どちらが得でどちらが損なのか、きちんと見究める人がきつといふにちがいない。」